慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「ゲーテの妻」再発見 : クリスティアーネ研究史と最近の研究動向
Sub Title	Ein Forschungsbericht über Frau Christiane von Goethe : Ergebnisse und Tendenzen
Author	石原, あえか(Ishihara, Aeka)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 No.36 (2003. 3) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20030331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「ゲーテの妻」再発見

―― クリスティアーネ研究史と最近の研究動向 ――

石原　あえか

1．はじめに　歪められたクリスティアーネ像

光溢れるイタリアから帰還したばかりのゲーテが，ヨハンナ・クリスティアーネ（ただし洗礼名はクリスティアーナ）・ゾフィア・ブルピウス（1765-1816）と運命的な出会いをしたのは，1788年７月12日のことだった。彼は38歳，彼女は23歳だった。その日からふたりは深い仲になり，イルム河畔の「庭の家 Gartenhaus」で密会を続ける。1789年，ふたりの関係が露見したのとほぼ同じ頃，クリスティアーネの妊娠が判明，彼女は同年12月25日，未婚のまま長男ユーリウス・アウグスト・ヴァルター（1789-1830）を出産する。クリスティアーネは，ゲーテと家庭を築いた，ただひとりの女性であった。ゲーテ夫妻の結婚生活は，18年間の事実婚，そして正式に結婚してからの10年の計28年に及んだ。

ゲーテの女性像は，彼が幼少期に接した女性，すなわち母カタリーナ・エリーザベト・ゲーテ（旧姓テクストル，1731-1808）と妹コルネリア・ゲーテ（1750-1777）のふたつのタイプに分類される。ゲーテは当初，彼の妹に似た繊細で理知的なシュタイン夫人に接近するが，壮年になると朗らかで，周囲の人間の心までも明るくするような実母のイメージを女性に求めた。快活で，心身ともに健やかなクリスティアーネは，ゲーテの母に酷似していた。一方，甘えん坊息子のゲーテは神経過敏で気難しく，しばしば強度の鬱状態に陥った。ゲーテの母は，クリスティアーネがどんなに息子に必要

な女性であるかを即座に見抜き，ふたりの関係を承認した。クリスティアーネをゲーテの「台所の宝 Küchenschatz」，「家の宝 Hausschatz」，そして「ベッドの宝 Bettschatz」と――むろん侮辱ではなく，好意的な意味で――評したのは，他でもないゲーテの母，アーヤ夫人だった。

しかしヴァイマルの上流社会は，ゲーテの同棲相手クリスティアーネの存在を認めなかった。ふたりの関係が発覚したとき，高級官僚としての地位と詩人としての名声がゲーテを守ったが，批判の矛先はクリスティアーネに集中した。たとえばヴィーラントは，クリスティアーネを「ゲーテの女中 Magd」と見なしたし，ふたりが事実婚を続けていた18年間，ヴァイマールでのクリスティアーネの地位は「ゲーテの家政婦 die von Goethische Haushälterin」であり続けた。18年にわたる事実婚を可能にしたのは，クリスティアーネが既に両親と死別していたことも大きな理由のひとつだったのだが，彼女がしっかりとした後ろ盾を持たないことは，彼女に対する攻撃を激化させた。シュタイン夫人を洗礼代母に持つシラーの妻シャルロッテは，クリスティアーネを「デブの空っぽ ein rundes Nichts」と呼び，ベッティーネ・フォン・アルニムは「血入りソーセージ eine Blutwurstにしたら，さぞかし上等だろう」と悪態をついた。ゲーテの旧友にして主君のカール・アウグスト公は，生涯クリスティアーネを認めなかった。彼女の死後12年経った1828年になっても，カール・アウグスト公は法務長官フォン・ミュラーに「あのブルピウスが全てを台無しにし，ゲーテを私達から遠ざけた」と毒づいた。このような「クリスティアーネ＝悪妻，醜女」の公式は，ゲーテを崇拝する後世の作家，たとえばトーマス・マンやロマン・ロランにも継承され，歪められたクリスティアーネ像が定着する結果となった。さらにこの偏ったイメージは文学研究者達にも受け継がれ，クリスティアーネこそ文豪ゲーテの人生最大の汚点であり，語るに足らぬ無教養な女と見なされた。ようやく1990年代になって，これまでの偏見に満ちたクリスティアーネ像に疑問が投げかけられ，一次文献の再検討が始まった。本論のねらいは，これまでのクリスティアーネ研究を概観し，その問題点

を指摘するとともに，1990年以降の新しい研究成果および研究動向を紹介することにある。

2．クリスティアーネ研究史概観[1)]

クリスティアーネ没後100年にあたる1916年，グレーフによって『ゲーテ夫妻の往復書簡』[2)]が初めて刊行された。ここにクリスティアーネ研究の基礎が築かれたが，しばらくそれに続く研究はなかった。最初の伝記は，1949年に発行されたヴォルフガング・ブルピウス作『クリスティアーネ。ゲーテとの結婚生活における処世術と人間性』[3)]である。苗字が示すように，伝記作家はクリスティアーネの兄・クリスティアン・アウグスト・ブルピウス(1762-1827)[4)]の曾孫である。ブルピウス家の末裔であることの誇りが

---

1) クリスティアーネに関する単独研究に限る。邦文による参考文献としては，高橋健二著『ゲーテと女性』(郁文堂1948年)および『ゲーテをめぐる女性達』(主婦の友社1977年)，山下肇著『ドイツ文学とその時代　夢の顔たちの森』(有信堂1978年・増補版，第2章4節「ゲーテの妻」S.26-33)などにクリスティアーネに関する言及がある。他の日本語によるゲーテ関連資料にもクリスティアーネの名は挙げられているものの，フリデリーケ・ブリオーンやシュタイン夫人と比較するとウエイトは低く，「ゲーテの妻」の存在が日本のゲーテ研究においても軽視されてきたことがわかる。なお拙文2本：『ゲーテの妻　クリスティアーネ』(慶應義塾大学出版会発行『三色旗』2001年7月号，S.18-25。2002年12月15日放送のラジオたんぱ『慶応義塾の時間』・シリーズ「各国文学にみる女性たち」第3夜(22:00～22:30)の放送原稿に加筆・修正したもの)，および『ゲーテ周辺の女性達』In:『ドイツ女性の歩み　中世から現代まで』河合節子／野口馨／村上公子編，東京(三修社)2001年，S. 185-200.をあわせて参照いただければ幸いである。

2) *Goethes Briefwechsel mit seiner Frau*. Hrsg. v. Hans Gerhard Gräf. Frankfurt (Ruetten & Loening) 1916, 全2巻.

3) Wolfgang Vulpius (1897-1978): *Christiane. Lebenskunst und Menschlichkeit in Goethes Ehe*. Weimar (Gustav Kiepenheuer) 1949, überarbeitete Fassung 1953.

4) 騎士や盗賊を主人公にした流行小説家として活躍。特に『リナルド・リナルディーニ』(1797-1800)は傑作として知られる。手がけた滑稽小説および時代小説は60以上，加えて雑誌の編集や学術論文の執筆も行った。同時に

見え隠れする部分があるものの，優れた文学研究者でもあったブルピウスは，一次文献等を参照しつつ，中立的な立場で真のクリスティアーネ像を伝えることに努めており，信頼に足る伝記となっている。なお最近復刻されたシュタットレンダーの『フラウエンプラーンの小さな世界。クリスティアーネ・ブルピウスとのゲーテの日常』(1966)[5] は，ゲーテ夫妻の結婚生活におけるトピックを年代順に並べたもので，1788年から1816年までの28年間がコンパクトにまとめられている。

1984年にパルトが発表した『ゲーテのクリスティアーネ』[6] は，文末に参考文献表も添えられているのだが，たとえばゲーテとクリスティアーネの出会いや結婚がドラマティックに脚色されており，信憑性に問題がある。この点については，『ゲーテ年鑑』で1916年から1982年までのクリスティアーネ像変遷を報告したフィトア・エングレンダーも，パルトの著書が小説としてはともかく，伝記としては問題があることを指摘している[7]。

1990年代になると，ジャーナリスト出身の伝記作家クレスマンが，ゲーテ夫妻の往復書簡および同時代人の証言などを手がかりにした『クリスティアーネ。ゲーテの恋人にして伴侶』[8] を発表，不当に虐げられてきたゲー

ヴァイマルの図書館（現在のアンナ・アマーリア大公妃図書館）司書として勤務，1817年以降はイェーナ大学附属図書館の再編成に尽力した。Vgl. *Weimar. Lexikon zur Stadtgeschichte*. Hrsg.v. Gitta Günther, Wolfgang Huschke und Walter Steiner. Weimar (Böhlau) 1998, hier S.474f.

5) Chris Stadtlaender: *Die kleine Welt am Frauenplan. Der Alltag Goethes mit Christiane Vulpius*. München (Heimeran) 1966. 2001年に Pendo社 (Zürich/München) から復刻版刊行。ただしVietor-Engländerのクリスティアーネ研究史概観 (1985) には，この著作に関する言及はない。

6) Wolfgang W. Parth: *Goethes Christiane. Ein Lebensbild*. München (Kindler) 1980.

7) Deborah Vietor-Engländer: *Der Wandel des Christiane-Bildes 1916-1982*. In: Goethe-Jahrbuch Bd. 102 (1985), S.280-284, hier S.282.

8) Eckart Kleßmann: *Christiane. Goethes Geliebte und Gefährtin*. Zürich (Artemis) 1992. 邦訳有り。重原眞知子訳：『ゲーテが愛した妻クリスティアーネ』あむすく1988年。

テの妻の名誉回復を行った。クレスマンは，日々を快適に過ごす術を知り，掛け値無しでゲーテに惜しみない愛情を注いだ女性としてクリスティアーネを描き，従来の悪評高いクリスティアーネ像を修正した。しかし最近のクリスティアーネ研究において重要な意味を持つのは，1998年に発表された，原文540ページを超えるジークリット・ダムの『クリスティアーネとゲーテ。ひとつの調査』[9] だろう。ゲーテの模倣者として知られる作家レンツの伝記，レンツと親しかったゲーテの妹コルネリアの伝記を次々と発表したダムは，この大作でゲーテの人生および創作活動の主要な時期をともにした女性クリスティアーネの生涯を丁寧に辿った。ダムの作品の特色は，作品執筆に際して，古文書および公文書館での入念な資料調査およびそれによって得た膨大な資料の整理・分析を行っていることにある。また前作『コルネリア・ゲーテ』[10] と同様，ダムの『クリスティアーネとゲーテ』は，ゲーテが傑作を生む代償として，自他を省みず，いかに人間性を犠牲にしたかを明らかにし，巨匠ゲーテの暗い側面すなわち身勝手さと精神的な脆さを露呈させている。ドイツ文学研究者でもあり，優れた編纂者でもあるダムは，クリスティアーネの伝記と並行して『ゲーテ夫妻往復書簡(抜粋)』[11] や『クリスティアーネの日記1816年』などの重要な一次文献の出版にも貢

---

9) Sigrid Damm: *Christiane und Goethe. Eine Recherche.* Frankfurt a.M./ Leipzig (Insel) 1998. ダムは，1940年チューリンゲン州ゴータに生まれ，イェーナ大学でドイツ語ドイツ文学と歴史学を専攻，同大学で教鞭をとった。1970年からは評論家・編纂者として，また1978年以降は活動拠点をベルリンに移し，フリーの作家として活動している。

10) Sigrid Damm: *Cornelia Goethe.* Berlin/ Weimar (Aufbau) 1987. 邦訳有り。西山力也訳：『奪われた才能　コルネリア・ゲーテ』郁文堂1999年。

11) *„Behalte mich ja lieb!" Christiane und Goethes Ehebriefe.* Auswahl und Nachwort von Sigrid Damm. Frankfurt am Main/ Leipzig (Insel-Bücherei. Nr.1190), 1998. ダムの資料分析については編纂者後書Nachwort: *Ach ja, da läßt Du mich nicht allein.* S.93-115を参照のこと。なおこの後書は，1999年刊行のダムのエッセイ集Sigrid Damm: *Atemzüge.* Frankfurt a. M./ Leipzig (it 2585) 1999のS.270-294に転載されている。

献している。以下の部分では，ゲーテ夫妻往復書簡集の問題点およびクリスティアーネ最後の日記出版の意義について言及する。

3．現存する往復書簡の問題　ゲーテ自身による検閲

『詩と真実』のなかで，ゲーテは数々の女性との恋愛を饒舌に語った。それらは巨匠の手でロマンティックに脚色された美しい恋物語だった。これに対して，彼に本当の恋愛における駆け引きや精神的葛藤，喜怒哀楽を教えたふたりの女性，シャルロッテ・フォン・シュタイン夫人とクリスティアーネについては，ゲーテは言葉少ない。ゲーテが敢えて語ろうとしない，このふたりの女性との関係を知る重要な手がかりとなるのは書簡である。しかしシュタイン夫人がゲーテに宛てた書簡はすべて破棄されており，現存するのはゲーテからの一方通行的な独白である。他方，ゲーテ夫妻の往復書簡については601通が現存しており，その内訳は，クリスティアーネが夫に宛てた書簡が247通，ゲーテが妻に宛てた書簡が354通となっている。この意味でゲーテ夫妻の書簡は，相互の会話として成立している[12]。

ゲーテとクリスティアーネの結婚生活は，ゲーテ38歳から67歳までの旺盛な執筆活動の時期にぴったりと重なっている。ゲーテは執筆活動に100%集中できる状況を作り出してくれるパートナーを必要とした。つまり彼の妻は，日常の雑事は全て肩代わりしてくれ，彼が必要とすれば何ヶ月でも，ともすれば半年以上もの間，留守宅を安心して任せられる家政能力に優れ，

---

12) 1998年にドイツ・グラムフォン社から発行されたCDブック Johann Wolfgang von Goethe & Christiane Vulpius: *„Lieber Geheimrath...“ Eine Liebes- und Ehegeschichte in Briefen, Gedichten, Tagebüchern und Zeitzeugnissen.* Hamburg 1998では，ゲーテ夫妻の「会話」が簡潔に，いきいきと再現されている。吹き込みは，ベテラン声優夫妻Gisela und Gert Westphalが担当している（約72分）。またゲーテ夫妻の往復書簡には，ふたりだけに共通する（特に性愛や妊娠に関連した）隠語が使われている。これらの意味を知るためには，Martin Müller: *Goethes merkwürdige Wörter. Ein Lexikon von Martin Müller.* Darmstadt（Wissenschaftliche Buchgesellschaft）1999が役立つ。

責任感があり，精神的に自立した大人の女性でなければならなかった。

こうして選ばれたクリスティアーネにとって，フラウエンプラーンの大邸宅の切り盛りは，彼女の腕の見せどころであり，それを任されていることは彼女の誇りであった。ゲーテが彼の仕事の進行状態を報告する一方で，クリスティアーネは留守宅の状況と彼女の作業を手紙にしたためた。クリスティアーネがゲーテに宛てた書簡からは，彼女の勤勉な仕事ぶりが窺える。妻の威信にかけて，夫宛の郵便物は絶対に紛失してはならなかった。彼女は料理をし，パンを焼き，畑でアスパラガスや馬鈴薯を栽培し，多く収穫した野菜は売却して家計費の足しにした。空き瓶と引き換えにもらう小銭まで勘定に入れた計算書を作成して，単身赴任中の夫に指示を与えるなど，家計にも細心の注意を払った。ハーブは自家製の新鮮なものを使い，庭でとれた果物はジャムやムースに加工され，自家製塩漬けキャベツやピクルスとともに地下室に貯蔵された。また冷蔵庫のない当時は一大行事だった自家屠殺も行われた。クリスティアーネはゲーテ家の使用人を掌握し，鍵を管理し，豪邸内の各部屋の清掃と模様替えを指揮した。もちろんゲーテの衣類を管理したのもクリスティーネだった。彼女は夫の下着を縫い，ハンカチに刺繍を施した[13]。むろん洗濯も他人任せにせず，自ら率先して洗濯に始まって，その乾燥とアイロンがけ，枚数確認に至る一連の作業を行っている。

しかしゲーテ夫妻が交わした往復書簡は601通だけではない。ゲーテは，死後自分の書いたものが公開されることを百も承知していた。老獪な作家は，巧みなイメージ戦略をとった。ゲーテを研究する者は，ツェルターとの往復書簡やエッカーマンとの対話が，当初から一般に公表することを前提にしたものであることを忘れてはならない。そしてゲーテは自分が後世に残したいイメージを壊す危険のある資料は，ひとつ残らず処分した。10

13) ゲーテ所有の54枚のハンカチのうち，13枚にJ.W.G.のイニシャル，数枚はW.G.，他のものにはv.G.の刺繍が施されていたという。またゲーテ所有の42枚のスカーフ，81足の靴下にもイニシャルが縫いとられているという。

年間文通を続けた，たったひとりの妹コルネリアの書簡ですら焼却したゲーテである。当然，夫婦間の往復書簡にも，彼自身の検閲が入った。まず言わずと知れた1797年の「焚書」(＝第３次スイス旅行出発前の文書破棄)で，クリスティアーネがゲーテに宛てた初期の恋文および1793年までにゲーテがクリスティアーネに宛てた手紙が焼却処分された。このため，ふたりの蜜月時代の書簡は完全に欠落している。その後もどうやら何度か文書焼却は行われたらしい。たとえば1804年から1810年までのほぼ７年近い期間――この時期はゲーテの重病，フランス軍との戦闘，ヤーコプ教会での挙式，ゲーテの母の死など，ゲーテ夫妻にとって波乱に満ちた時期なのだが――，この間にクリスティアーネがゲーテに宛てた手紙は一通も残されていない。

ちなみに，ゲーテがクリスティアーネに宛てた現存する最後の手紙は，1815年９月27日付，ハイデルベルクが発信地となっている。ゲーテは1815年５月24日から10月11日まで，第２次ライン・マイン川流域旅行に出た。1815年の８～９月，ヴィレマー家の別荘に滞在したゲーテは，彼の「ズライカ」であるマリアンネ・フォン・ヴィレマー(1784-1860)によって精神的な若返りを感じ，情熱的な相聞歌を詠み交わした(『西東詩集』)。一方，「８月初旬にはヴァイマルに戻る」という夫の手紙(７月11日付)を受けとった妻クリスティアーネは，カールスバードでの湯治を切り上げ，50歳の誕生日を夫と祝うために(彼女の誕生日は何故か６月１日ではなく，８月６日に祝われるのが恒例となっていた)，急いで家路につく。しかしゲーテは戻らなかった。1815年９月５日と14日付のゲーテに宛てた手紙からは，期待をはぐらかされたクリスティアーネの深い失望が読み取れる。マリアンネと別れた翌日1815年９月27日，９月14日付のクリスティアーネの手紙にゲーテはようやく返事を書いた。美しい夏の夢から醒めた詩人は，音信不通だった間の一連の出来事を妻に淡々と報告している。

クリスティアーネ最後の手紙は，翌1816年５月22日付で，隣町イェーナに滞在中のゲーテに宛てたものである。お決まりの「親愛なる枢密顧問官様！」で始まるこの短い手紙で，彼女は体調が快方に向かったこと，また

追伸ではシャンパンの貯蔵が尽きたこと，イェーナ滞在中の夫のためにワインボトルを2本送る手配をしたことを知らせている。

4．クリスティアーネの日記(1816)

『ゲーテ夫妻の往復書簡集』編纂者グレーフは，ゲーテの仕事部屋でクリスティアーネの日記を発見したことを，ちょうどクリスティアーネ没後100年にあたる1916年の『ゲーテ年鑑』で報告している[14]。しかしその後80年間，誰もこの日記に注目しなかった。そして1996年，ダムはクリスティアーネの日記を手稿からおこす作業に着手，詳細なデータ(当時の新聞やゲーテをはじめとする関係者の日記からの引用など)を添えた『クリスティアーネ・ゲーテの日記(1816年)』が1999年にインゼル社から出版された[15]。

ゲーテが継続的に日記をつけていたことはよく知られている。しかもゲーテは，自分の周囲の人間にも日記をつけることを強制し，必要に応じて彼らの日記を執筆活動の材料にした。ゲーテの秘書はもちろん，息子アウグストも妻クリスティアーネにも日記が課された。今日，ゲーテ研究者は全8巻に及ぶ『ゲーテの日々総覧』[16]を繰れば，望む日のゲーテの行動を即座に知ることが出来るが，これを可能にしたのはゲーテをとりまく人々の献身的かつ地道なルーチン・ワークなのである。さらに1809年11月末から秘書リーマーと結婚する1814年までゲーテ一家と同居したカロリーネ・ウルリッヒ(1790-1855)，およびゲーテ一家と親交のあった若き女優エルネスティーネ・エンゲルス(1795?-1845)にも日記が課されていたらしい。ただし

---

14) Hans Gerhard Gräf: *Zum 6. Juni 1916. Eine Jahrhunderterinnerung*. In: Jahrbuch der Goethe-Gesellschaft 3 (1916), S.245-262.

15) *Christiane Goethe. Tagebuch 1816 und Briefe*. In Verbindung mit dem Goethe-Nationalmuseum Weimar nach der Handschrift hrg. von Sigrid Damm. Frankfurt a. M./ Leipzig (Insel Taschenbuch 2561) 1999.

16) *Goethes Leben von Tag zu Tag. Eine dokumentarische Chronik* von Robert Steiger. Zürich (Artemis), 1982-1996.

前者カロリーネ・ウルリッヒの日記は大部分が破棄され，断片のみが残されている。またエルネスティーネ・エンゲルスの日記で現存しているのは，1816年の元旦から6月3日までの書き込みだけである。

とりわけゲーテは旅行記に関心があった。ゲーテに身近な者は，必ず詳細な旅行記録を提出しなければならなかった。『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』で，主人公ヴィルヘルムに面倒な旅行記を強要する父親は，ゲーテの姿そのものだったのである。その一例として，近年刊行されたゲーテの息子アウグストの絶筆『イタリア紀行』[17] が挙げられるだろう。息子アウグスト・フォン・ゲーテは，父親の軌跡をなぞるように1830年4月にイタリアに出立，同年10月にローマで客死した。当然のことながら妻クリスティアーネにも旅行記が課された。クリスティアーネによる旅行記には，1797年のフランクフルトからヴァイマールへの道中を記した書簡日記，彼女が好んで滞在した湯治場バード・ラオホシュテットの湯治日記（特に1803年の湯治），1815年のベーメン旅行記などが残っている。几帳面な主人ゲーテにとっては，詳細な貸借対照表を得ようとする意図もあったのだろう。

さて，1816年のクリスティアーネの日記からは，どのようなことが読み取れるのだろうか。もともと筆不精なうえ，毎日詳細な金銭出納簿（＝家計簿）もつけなければならなかったクリスティアーネにとって，日記など面倒極まりない仕事だった。たとえば前年1815年のクリスティアーネの日記は（同行者のキルシュ夫人が口述筆記した6月3日から7月31日までのベーメン旅行記を別とすれば），すでに1月9日[18] で中断され，あとはすべて白紙だという[19]。ところが1816年は，1月1日元旦から5月24日まで，および彼

17) このアウグストのイタリアにおける日記と書簡はすでに邦訳され，『もう一人のゲーテ　アウグストの旅日記』（藤代 幸一・石川康子訳）というタイトルで，2001年に法政大学出版局から刊行されている。

18) この日の午前中，ゲーテ夫妻はいつものように馬車で遠乗りに出かけた。途中，馬が暴れたのが引き金となり，クリスティアーネは意識を失う。軽い脳卒中の発作だった。

19) Vgl. Sigrid Damm (Hrsg.): *Christiane Goethe. Tagebuch 1816 und Briefe*. Hier

女が危篤に陥る5月29日と30日の計147日間の記録がある。クリスティアーネが没したのは1816年6月6日だから，彼女は最後の年1816年については，ほぼ毎日几帳面に記録したことになる。このとき口述筆記をつとめた新参者の書記クロイター(1790-1856,1814年以降ゲーテの秘書)とクリスティアーネは，相性が良かったらしい。日記は，おそらくゲーテが定めたのであろうシェーマに則っている。当日の作業確認，手配済みの作業記録，来客，読書内容，正餐の客，発送した郵便，遠乗り，観劇，その他重要事項が，成立順に箇条書きされている。

クリスティアーネの日記自体は，一見，コメントも感情の吐露もない淡々とした記録である。しかしこれにゲーテの日記や彼女がゲーテに宛てた手紙をあわせて検討すると，1816年のゲーテ夫妻の生活を再構築することが可能である。夫妻の日記を比較すると，フラウエンプラーンの邸宅には常時ふたつの文化圏が存在していたことが判る。奥の部屋ではゲーテが書記のマイヤーやリーマーとともに仕事に没頭し，手前の部屋ではクリスティアーネが自分の友達をもてなしているか，来客がなければ読書をしていた。正式に結婚し，「枢密顧問官夫人」の称号を得たクリスティアーネは，シュタイン夫人やシラー夫人をはじめとする上流階級の奥方と交際し，ショーペンハウアー夫人主催のサロンへの出席も許される身となっていた。しかし同時にクリスティアーネは旧友を恥じることもなければ否定もせず，最後まで独自の交際関係を維持した。彼女の日記には，ゲーテ夫人という地位には不釣合いな，とるに足らない小市民達やいわゆる「河原乞食」に等しい存在の劇団員達の名が彼女の客として記載されている。

クリスティアーネは，流行作家の兄クリスティアン・アウグスト・ブルピウスを通して，若い頃から芝居の世界に親しんでいた。そして俳優達の社会的保証のない不安定な生活も熟知していた彼女は，厳格で理想主義者の劇場監督ゲーテと俳優達の仲介者・助言者としての役割を担った。また

S.15 *„Vorwort“*.; Gräf: *Zum 6. Juni 1916,* S.246

クリスティアーネは1816年前半の5ヶ月間で計43回ヴァイマル宮廷劇場に足を運んでいるが，うち15回の観劇は，宮廷劇場総監督である夫ゲーテの同伴である。加えて家族揃っての食事，共通の客の接待，馬車でヴァイマル近郊を散策することがゲーテ夫妻の接触点となっていた。

また日記からは，すでに体調が悪化していたにも拘わらず，クリスティアーネがまるでものに憑かれたかのように家事全般をこなしていることが読み取れる。もっとも1816年はゲーテ家に仕えていた使用人のほとんどが交代しており，女主人であるクリスティアーネは病身に鞭打ってでも，自ら采配を振るわねばならない状態にあった。彼女の日記の冒頭には，ほぼ毎日，「家事一般 Hauswirtschaft, Haeusl. Beschäftigungen und Vorrichtungen, Hauswirthschaftl. Besorgungen」，「家計管理 Hauswirthschaftl. Rechnung, Wirtschaftl. Gedanken」，「大洗濯 Große Waesche」とその「アイロンがけ gebiegelt」といった言葉が書きとめられている。そして1816年5月11日にゲーテがイェーナに出かけるや否や，クリスティアーネは毎年恒例の大掃除を開始している。5月14日の記述には「家中の清掃完了」[20] とある。この大掃除は，騒音に敏感な主人ゲーテのために，決まってその不在中に行われることになっていた。そして1816年5月29日，彼女は危篤に陥り，病魔との最後の激しい苦闘の末，6月6日正午，とうとう還らぬ人となった。

5月29日に妻危篤の知らせを受けたゲーテは，慌ててイェーナから帰宅する。しかしこの後，ゲーテは彼特有の行動をとる。つまり身近な人間が病床に臥したこと，もしくは死期が迫っていることを知らされると，ゲーテは仕事に没頭し，自らの心身を消耗させる。そして疲労困憊した彼は，自らも病床に臥してしまう，というお決まりのパターンである。「身近に病人がいる」という事実は，それだけでゲーテの執筆活動に支障をきたした。ゲーテは，およそ死や病というものに対する病的なまでの恐れを抱いていた。最愛の母親が亡くなった時も，ゲーテは遺品整理・形見分けをクリス

---

20) *Christiane Goethe. Tagebuch 1816 und Briefe*, hier S.322.

ティアーネに一任し，自らフランクフルトに赴くことはなかった。また後年，溺愛していた嫁オッティーリエが落馬したときも，ゲーテは彼女の傷が完全に癒えるまで視界に入らないよう遠ざけた。したがって1815年春に軽い脳卒中の発作をおこして以来，体調が思わしくない妻を2ヶ月間の湯治に行かせたのは，ゲーテなりの愛情表現ではあったが，同時にそれは病人を彼の視界から斥けようとする行為でもあった。こうしてヴァイマル帰宅後のゲーテは，がむしゃらに仕事をし，案の定6月4日には高熱を出して自らも床につく。そしてクリスティアーネの臨終の時も，ゲーテは彼女の病室から数部屋離れた自分のベッドに横たわったまま，死神が妻を連れていくのを，息を潜めて見送った。夫ゲーテは，尿毒症に苦しむ妻の断末魔の叫びを耳にしながら，彼女の枕辺にかけつけようとはしなかった。また妻も死の床に夫を呼び寄せることなく，孤独のうちに息をひきとった。ゲーテの6月6日の日記には次のように記されている。「妻の死期が近い。彼女の肉体の，最後の恐ろしい闘い。昼頃に逝去。私の内も外も空虚で，静寂だけが支配している」[21]。同じ6月6日，ゲーテは悲嘆と絶望に満ちた4行詩を詠んだ。

おお太陽よ，暗雲を貫いて
輝こうとしてもそれは無駄な試みというもの！
私の人生をかけて得たもの，それは
彼女を喪ったことを嘆き悲しむということ。[22]

1816年6月8日午前4時，クリスティアーネの亡骸はヤーコプ教会に埋葬された。ゲーテはどんなに親しい人物の葬式にも参列しなかったが，それは長年連れ添った妻に対しても例外ではなかった。それどころか告別式の2日後，6月10日，ゲーテは故人を偲ぶ品が視界に入ることに耐えられ

21）ヴァイマル版『ゲーテ全集』WA III-5, S.239.
22）ミュンヘン版『ゲーテ全集』MA 11-1-1, S.167.

ず，クリスティアーネの部屋から遺品を運び出し，完全に模様替えするよう命じた。そして彼自身は仕事に没頭することで，妻の逝去という現実から逃避しようとしたのだった。

にもかかわらずゲーテは，妻が最後の年・1816年につけていた日記を仕事部屋に持ち込んだ。今なおクリスティアーネの日記は，ゲーテが最重要と見なしていた著作，すなわち自らの決定版全集とシラーとの往復書簡集の隣に並べられている。几帳面で，無類の整頓好きだったゲーテがこの場所に亡き妻の日記を置いたということは，おそらく偶然ではないだろう。

5．終わりに

若くして両親を失った薄幸な町娘クリスティアーネは，ゲーテという特異な人物の人生に深く組み込まれることによって，無上の栄誉に浴した。しかしそれと引き換えに彼女は，過酷なまでの憂愁に耐えなければならなかった。

ゲーテ生誕250年にあたる1999年，クリスティアーネを主人公とした映画『花嫁 *Die Braut*』が封切られた。映画監督のエゴン・ギュンターは，この映画を偉大な天才にして権力者の男（＝ゲーテ）とちっぽけな，およそ権力とは程遠い若い娘（＝クリスティアーネ）のラブ・ストーリーであると述べている[23]。同時にギュンター監督は，この映画のテーマを「ふたつの異なる文化圏の間の愛と死」とし，ゲーテがつくる高度な文化圏とクリスティアーネの反抗的でプロレタリア的な文化圏との衝突を描こうと試みており，ダムの新しい解釈に非常に近いクリスティアーネ像を提示している。

長年連れ添った夫婦でありながら，ゲーテとクリスティアーネの住む世界は異なっていた。それが死後の世界にもあてはまるのかは定かでないが，

23）エゴン・ギュンター/山根恵子：『エゴン・ギュンター監督に聞く。新作のゲーテ映画「花嫁」をめぐって』In:『モルフォロギア　ゲーテと自然科学』第21号（1999），京都（ナカニシヤ出版）　S.126-137参照。

ふたりは現在も異なる墓地に葬られている。現在，ヴァイマル歴史墓地内の王侯貴族専用墓所（Fürstengruft）中央にゲーテはシラーと棺を並べ，ドイツ古典主義文学の崇高なる世界を誇示している。一方，ゲーテの妻クリスティアーネは，ゲーテと永遠の愛を誓った場所，ふたりが正式な夫婦となったヤーコプ教会の隅でひっそりと，たったひとりで眠っている。

写真資料解説（17～20ページ）

1）『クリスティアーネ』　ゲーテ自筆。
資料番号Corpus IVb, Nr.38, Inv. Nr.864。もともと画家になりたかったというゲーテは、折に触れてクリスティアーネの肖像画を描いた。写真は通称「古代趣味のクリスティアーネ」と呼ばれる肖像画で、1788年もしくは1789年頃の作と推定されている。

2）『「イェーガーハウス」のクリスティアーネ』　J.P.リップス筆（1790年頃）
クリスティアーネとの恋愛関係が発覚したことにより、ヴァイマル宮廷、特に主君カール・アウグスト公の妻・ルイーゼ公妃の反感をかったゲーテは、これまで住んでいたフラウエンプラーンの住居を立ち退かざるを得なくなった。このためゲーテ一家は、市門の外、マリーエン通りのイェーガーハウスで新婚生活を送ることになった。写真はその頃の新妻クリスティアーネの肖像画。1792年６月、ゲーテ一家は再びフラウエンプラーンの家に転居。以後、ゲーテは死ぬまで住まいを移すことはなかった（1794年6月17日、カール・アウグスト公はゲーテにこの邸宅を贈与した）。なお、フラウエンプラーンの邸宅は、現在「ゲーテハウス」として一般公開されている。

3）『クリスティアーネの日記』

4）『クリスティアーネの墓碑』（旧墓碑）
クリスティアーネの亡骸は、ゲーテとクリスティアーネが1806年10月19日に挙式したヤーコプ教会の墓地に葬られた。しかしヤーコプ教会墓地は彼女の死後2年後に閉鎖され、荒廃した。生前ゲーテが妻クリスティアーネの墓に関心を示さなかったこともあり、しばらくクリスティアーネの墓地が特定できない状態にあったが、1888年に彼女の墓地が再確認された。こ

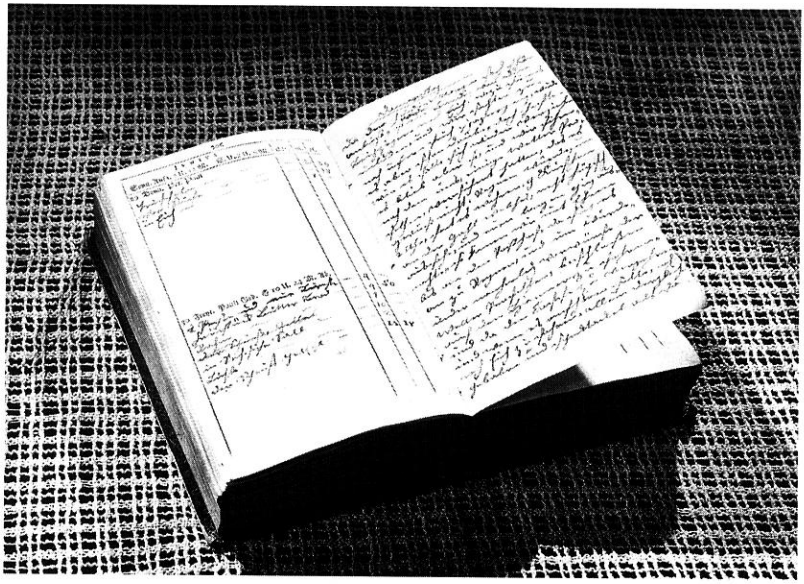
れをうけてゲーテ協会が墓碑を発注、クリスティアーネが逝去した際にゲーテが詠んだ4行詩「おお太陽よ・・・」(本論参照) を刻ませたが、肝心のクリスティアーネの生年が1765年ではなく、1年早い1764年になっていた。ゲーテ研究におけるクリスティアーネの存在軽視の一例として、この旧墓碑の写真を挙げておく。1990年代になって、再度ゲーテ協会によって墓碑が改められ、正しい生没年月日(1765年6月1日生、1816年6月6日没) が刻まれた。この写真では低い生垣が、現在では青々と高く茂り、新しい墓碑を囲んでいる。

付記

上記写真資料4点は、ヴァイマル・ドイツ古典主義文学研究財団 (Stiftung Weimarer Klassik) およびゲーテ国立博物館(Goethe-Nationalmuseum)より掲載をお認めいただきました。心からお礼申し上げます。なお、この研究報告は、平成14年度日本学術振興会海外特別研究員として2002年秋から滞在中のドイツにおける研究成果の一部です。　(2003年1月　筆者)

1)『クリスティアーネ』(ゲーテ自筆)

2)『「イェーガーハウス」のクリスティアーネ』(J. P. リップス筆)



3)『クリスティアーネの日記』

4)『クリスティアーネの墓碑』(旧墓碑)